

A stylized illustration of a woman in a kimono, rendered in red and blue ink. She is seated, looking forward with a neutral expression. Her hair is styled in a traditional Japanese fashion. The background is split into a dark blue, textured upper half and a solid red lower half.

天の夕顔

失楽の庭

他一編

中河与一

旺文社文

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたつて、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人た然とする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務であしく出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、このて、にひたむきに献身するものである。あえてわが社の行せし理解されご支援あらんことを。

旺文社社長 赤尾好夫

茅 誠司 茅 誠司 木村 毅
森戸辰男 森戸辰男 (五十音順)

失楽の庭・失楽の庭 定価はカバーに表示してあります
他一編

和42年5月10日	初版発行
和48年11月20日	重版発行
者 者 なか 河 よ	与 一
発 行 者 中 鳥 居 正 博	
印 刷 所 旺文社 日新印刷株式会社	

発 行 所 株式会社 旺 文 社
162 東京都新宿区横寺町
電話 東京 (03) 267-1111 [代]

0193 610-51 0724

808031

© 旺文社 1967

(許可なしに転載、複製することを禁じます)

(中村印刷・穴口製本)

不良本はお、不良本はお取り替えます
社に直接お本社に直接お申し出ください

旺文社文庫

てん天の夕顔・失楽の庭
ゆう がお しつ らく
(他) ひげ鬚

中河 与一 著

旺文社

原文は新かなづかいに改めたほか、原文の表現をそこなわない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

(編集部)

天^{てん}

の

夕^{ゆう}

顔^{がお}

つれづれと空ぞ見らるる思ふ人天くだり来むものならなくに⁽¹⁾

和泉式部⁽²⁾

(1) 出典は『和泉式部集』第一恋の二。大意は、つれづれと空が見られることである。(しかし)思う人が天から降ってくるということはないのに、という恋歌。
 (2) 平安中期の歌人。大江雅致の娘。和泉守橘道貞の妻となり、子に小式部内侍^{ないし}があった。為尊親王^{ためかた}、敦道親王^{あつみち}の寵^{ちよう}を受け、中宮彰子^{ちゆうぐうあきこ}に仕え、再び藤原保昌^{やすまさ}に嫁ぐなど、その一生は恋愛に終始していた。生没未詳。『和泉式部日記』『和泉式部集』がある。一首は作品全体の構想を暗示するもので、この作品の結末に結びつくものである。

第一章

信じがたいと思われるでしょう。信じるということが現代人にとっていかに困難なことかということは、わたくしもよく知っています。それでいてもっとも信じがたいようなことを、もっとも熱烈に信じているという、この狂熱に近い話を、どうぞ判断していただきたいのです。

わたくしは一つの夢に生涯を賭けました。わたくしの生まれて来たことの意味は、だから言ってみればその儂^{はかな}げな、しかし切なる願いを、どこまで貫き、どこまで持ちつづけたかということになるのです。ばかばかしいといって、人は、おそらく身体^{からだ}をふるわしてわたくしの徒勞^{とらう}を笑うかも知れません。それが現代です。しかしわたくしにとって、それは何事でもあり得ないのです。わたくしは現代に生きて、もっともたえがたい孤独の道を歩いているように思われます。

わたくしが初めてその人に逢^あったのは、わたくしがまだ京都の大学に通っていたところで、そのころ、わたくしはあの人の姿を、それも後ろ姿などをときどき見てはまた見失っていたのです。格別美しい人とも思われなかったのですが、どんな関係の人か、わたくしのいた素人下宿^{しろうと}の、部屋^{へや}の向こうなどで、見えているかと思うと、またいつか見えなくなっているのです。

間もなく、その人がそのうちの娘であり、今は結婚してだれかの夫人になっているのだということを知るようになりました。

ある朝、彼女はわたくしの部屋へあいさつにくると、自分の夫が今、外国に行っていることや、

間もなく自分はたった一人の母を失うかも知れないというようなことを話して帰りました。何か訴えるような悲しいものがあつたのを覚えています。

その人の母親、つまり下宿の女主人が入院していることは知っていましたが、そんなに悪いというのをわたくしは知らずにおりました。

そのうちにその人が死に、あの人は黒い喪服もふくをつけて、泣きながら母親の葬列そうれつに従っているのでした。すべてが何か不思議に思われる、異様な状態で、短い間につぎつぎに起こったように思われました。

その前のお通夜つやの夜は、わたくしもいっしょにお通夜をしましたが、その夜あの人の一人の子供が、夜がふけてから座蒲団ざぶとんの上に頭をつけたまま眠ってしまったて、それを見つけたあの人の叔母おばが、もう一枚、上からボンと座蒲団を小さい身体からだの上にかぶせたので、ほんとうの饅頭まんじゅうのようになって子供が、ひとしおあわれにみえたのを覚えています。

四十九日の観音講かんのんこうにも来てほしいというのでわたくしは出かけてゆきました。しかしわたくしなどにそんな集まりのしっくり感じられるはずはなく、わたくしは間もなく帰ったのですが、すると、あとから供え菓子そながとどけられ、儀式めいた手紙ながらあの人の文章で、わたくしが他人さびず、母親の入院当時見舞いに行ったことや、何くれと昨日今日手伝ったことに対する礼などが、達筆でしたためてあるのです。

(1) 法華經第八卷第二五品の普門品の別称である観音經を講ずる法会。
 (2) 神仏に供え奉ったお菓子。ここでは観世音菩薩おんぼさつに供えたもの。

そのころのわたくしは、もうそこから下宿を変わって、神楽ヶ丘かぐらおかの近くの知人のうちに移っていたのですが、どういうわけか、わたくしにはそのとおりいっぺんに見える手紙がうれしくてたまらなかったのです。自分のしたことことに単純な善行があったからかもしれない。しかし実は、そういうことほど恐ろしい悪魔を、いつも背後にひそませやすいものはないということ、あとで考えるようになりました。

わたくしはすぐ返事を書きました。あの人の悲しい気持ちなどをいろいろと想像して。

すると、また手紙が来て、それには、生前せいぜん、母が、いつもあなたをほめていた。母の思い出をつなぎに、そちらへまいったら、またお目にかかりましょうと書いてありました。

しかしわたくしたちは逢あわなかったのです。わたくしは友だちなどと、ときに頹廢たいはいを口にするほど、実は頹廢を拒否する強情こうじやうさを持っている青年だったのです。そのうち、何かをきっかけに、郵便で、わたくしはあの人から本を借りたことがありました。何しろわたくしは、天体物理の学生で、そのせいか、趣味としての女性の親しんでいる文学ほど、そのころのわたくしにとって、ふかぶかと美しく思われるものはありませんでした。

それは翻訳ほんやくの「アンナ・カレーニナ」(2)で、読みすすんでゆくうちに、わたくしはちょうどアンナが雪国の汽車からおりて来て、ウーロンスキイと不幸な、しかしこの世でもっとも喜びにあふれた逢い方をするあたりで、小さい一枚の名刺めいしを見つけたのです。

(1) 京都市左京区吉田町にある地名。(2) ロシアの作家、レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ(一八二八―一九一〇)が一八七五年に発表した小説で、アンナを主人公として当時の貴族社会を描いた作品。

それは名刺めいしとはいえない、ほんの紙切れといったほうがいいかもしれませんが、普通の名刺を半分に切ったくらいの細いものに、見るともなく見ると細い字で、「いつも逢あいたいと思うばかりに」と書いてあったのです。

格別、わたくしに宛あてたものであるはずはないのですが、わたくしはそれを幾度も幾度も眺ながめなおしました。

ところが、つぎに借りた「ボヴァリイ夫人」⁽¹⁾にもそんな榮しかりがはいっていて、それには、

わすれじの行末ゆくすえまでは難かたければ今日を限りの命ともがな——⁽²⁾

という高内侍こうないしの歌が書いてありました。⁽³⁾

彼女がだれかに宛てたものか、だれかが彼女に宛てたものか、それとも彼女がわたくしに宛てたものかと考えあぐんだ末、少なくとも、それが自分に宛てたものでないことだけは確かだと考えたのです。それはいっさいのだれに宛てたものでもなかったと考えるのが一等似つかわしく、そればかりかだれともわからぬ人がむしろそこはかたない心を書きつけたものと考えると、ひとしおにそ

(1) フランスの作家、フローベール(一八二一〜八〇)が一八五七年に発表した小説で、田舎医者の妻となったエンマが、夫に対する不満や情欲から最後は毒死するに至るまでを描いている。フランスレアリスム文学の代表作。(2) 出典は『新古今和歌集』第一三の恋歌の三。大意は、行く末なかく変わらなとおっしゃるけれど、人の心の定めなき世の、行く末までの恋はむずかしいので、私はいっそ、このうれしい今日をかぎりに死のうかと思ひます、という恋歌。

(3) 九九六。平安中期の女流歌人。藤原伊周これちかの母で、藤原道隆の妻。円融天皇の内侍・従三位。『新古今和歌集』の中では「儀同三司の母」という名前で見える。

のやさしさが身にしみるのでした。そしてわたくしもまた、その紙切れのうしろにだれに宛てるともなく、何か書いてみたいときえ考えるのでした。

そんな状態のまま、わたくしは何かクサクサする別のことがあって、しばらくあの人にも手紙をださずにおりました。

すると、あの人から手紙が来て、それには何かおたがいの間にわだかまりがあるのではないかしら、もしそうだったら打ちあけてほしい。二人の間に、どんな障害でも心にあるのはたえられないと書いてあるのです。

わたくしはその手紙の意味をどう解釈すればいいのか、了解に苦しみました。それで、それはどういう意味か知らしてほしいと、折り返して問いあわせの手紙をだしたのです。すると、そんならそちらへ行くことがあるから、そのときお目にかかってお話ししようと、返事がしたためてありました。

ちょうど六月の末で石榴の赤い小さい花が、葉の中に見え、わたくしは試験の用意にいそがしいころでした。王禪寺おうぜんじへいからの帰りみちだといって、あの人が立ち寄ってくれました。王禪寺はあの人がかつて参禅したところであり、また母親のお骨こつを最近納めたところでもあったのです。

折りあしくわたくしは夕食の時間で、そのことをいうと、彼女は何か落ちつかぬらしく、それでもその間の待つ間まにもと、わたくしから本を借りようとしたのです。わたくしは、何を出したものと、何か心ひけながら、幼い文学の本を出したのを覚えています。

わたくしが食事をすましてゆくと、彼女はうれしそうに座蒲団ざぶたんをはずし、もう一度あいさつをしながらそこにすわりました。しかしそのときの彼女の顔は何か真っ青で、わたくしにはそれが不可解に感じられました。

「お顔が真っ青ですね」

すると、あの人はそれを説明するように、しばらくして言ったのです。

「わたくし、ルビーの石を落としましたものですから。帰りみちで」

「惜しいことをしましたね」

「でも、なんでもないんですけれど、そのことは」

それから土産みやげだといって、桜ん坊の籠かごを出し、話をしながらまきかえし、くりかえし、ハンカチをもみもみしていました。そしてその日、彼女が話してくれたことは、自分の結婚は不幸ではなかったが、主人が洋行に出発した翌日、あと片づけをしていて、ふと日記を見ると、そこには主人がほかの女を愛していたことが書いてあり、今もその女に追跡ついせきせられているために、その苦しみから逃げようとして外国に行こうとしているのだ、ということがわかったというようなことでした。

言ってみれば、それはあの人への愛情とも思われるのに、それから長い間、あの人はその事実に悩んでいたというのです。外国へ言ってやっても、そのことについてだけは、ふれることが苦痛なのか、なんの返事もくれないし、そうかといってなんのしようもなかったし、今はやはり主人を愛そうと決心して、子供もあることであるし、どんなに夫が外国から長く帰ってこないでも、待っていていようと心にきめていたということです。

そんなとき、ちょうどわたくしと逢ったのですが、弟のようなわたくしと交際することは、何か姉弟の親しさのように、この上なく幸福であったが、もし自分が、あなたを愛しだしているのではないか、と考えると、そのことに危険を感じだしたというのでした。

「それで、わたくしは」

あの人は力を入れて言うのでした。

「今はいいけれど、この上交際をつづけていると、わたくし、自分の立場が苦しくなりそうに思われて来ましたの。だから今日は、お別れにまいりましたの」

「なんですって」

わたくしは意外の結論に言葉がつまると、それでも率直に自分の心を言いました。

「ぼくは恋愛の気持ちは無かったつもりですが」

「でも」

「ぼくは友情と考えて来ました、だから今のままで決して危険は無いと思いますが……」

わたくしは彼女が、今日は別れに来たという最後の言葉に、少なからず狼狽して言いました。

「でも、わたくしはもう決心してまいりました」

「……………」

「……………」

「そんならぼくたちは、もう、これっきりだとおっしゃるんですか」

「そう考えてまいりましたの」

卓^{つくさ}をへだてて端座^{たんざ}している彼女には、何か威厳^{いげん}のようなものが現われ、堅い決意を述べるその強さに圧倒されて、わたくしは、もう何も言うべき術^{すべ}も知りませんでした。

これが、わたくしが、彼女と逢^あって、彼女から突き離された最初でありました。

しかし、そのために、わたくしは今に至る二十幾年、あの人のことを思いつづける運命を持つようになつたのです。わたくしたちは生涯をかけました。これは、どうお話すればよいのか。わたくしは、あの人と思う思いに、今もたえがたい命を生きているのです。

その日はもう暗く、わたくしたちは初めて、いっしょに肩をならべて歩きました。

ついぞ逢うこともなくて、こんな気持ちになつてゐるのが不思議^{ふしぎ}に思われました。もっとも、わたくし自身は冷静のつもりだったのですが。

それにしても、こんなにすぐれた人と結婚していても、ほかの女を愛するという男の心理を思つて、わたくしは、それが考えの及ばない気がしました。そのときあの人はふとわたくしに言いました。

「お背が高くていらっしゃいますのね」

なんでもない言葉ですが、その中には、この一刻が、最初で最後であろうと、思いつめてゐるあの人の激しい悲しみがあふれていたと、あとになって、わたくしには幾度も思われるのでした。

ふとみると、彼女も、女としては高いほうであつたが、それでもわたくしの肩の下あたりにあの人の髪が見えました。

熊野神社^{くまの}前まで歩いてゆくと、ちょうど電車が来て、あの人は前から乗りました。

(1) 京都市上京区聖護院山王町にある神社。

動くまでじっと、わたくしは見ていました。燃えるような眼で、あの人もわたくしを見ていました。だが、やがて電車が動くと同時に、深いお辞儀をし、間もなく電車が角を回ると、彼女は見えなくなっていました。

その翌朝、わたくしは封緘ハガキの手紙をあの人から受け取りました。

その中には――

わたくしはボンヤリしていたので電車に乗ったまま七条の駅から島原のほうまでつれてゆかれました。駅にたどりついて鏡に映った自分の顔を見たときは、真っ青で、自分ながら今にも倒れはしないかと思われるほどでした。神戸のうちへ帰りましたら夜ふけの十一時。でも、このことだけは申し上げまいと思っていましたけれど、ああ、今は、もう全部申し上げてしまいます。ほんとうにわたくしはいつの間にか、熱情をそそいであなたをお愛し申し上げておりました。二十八の今日まで、あなたのような方にわたくしは一度もお逢いしたことがありませんでした。どうぞこんなことを申し上げるのをお許しくださいませ。わたくしは初め、あなたに歩調の乱れを見たら、すぐにも、いましめようと、いつも考えておりました。それなのに、先にわたくしのほうがだめになってしまいました。そればかりか、今となっては、不自然な愛情というものを平生から笑っていた自分の単純さが恥じられてなりません。わたくしは母を失い夫を失い、今は友情を

(1)現在の国鉄京都駅前の付近で、市電の停留所であった。(2)京都市下京区西部の地名。寛永一八年ここに遊郭を移したとき、島原の乱にちなんでその名がつけられたといわれる。長崎の丸山、江戸の吉原と並んで有名。